ベルリンの富山妙子
——フェミニストのアーティストがどういう風にしてトランスカルチャーの空間とネットワークを大きくすることができたのか？——

イルゼ・レンツ

フェミニストのトランスカルチャー空間の成立：ギャラリー・アンデレ・ツァイヘン（別の徴）での富山妙子

今から40年ほど前，小さなフェミニストギャラリー・アンデレ・ツァイヘンで史上初めてといえる事がたくさん起こった[1]。富山妙子は初めて西ベルリンで1982年の3月6日から20日の間展覧会を開き，エロス，人権と女性の権利，独裁と軍隊の暴力をテーマにした作品を展示した。初めて日本の女性アーティストの展覧会が女性だけの力で組織され，準備された。この機会に初めて，1982年3月16日，西ベルリンで韓国，日本，ドイツの女性たちが自分たちの問題や希望を語りあい，東洋と西洋での女性解放の可能性が共通の問題として受け止められた。話はまもなくオープンになり，個人的になり，女性たちはお互いの違いを受け入れた。この夕べに日本と韓国の女性グループの交流がはじまり，今日まで続いている。ドイツにある韓国協会（Korea Verband）の「慰安婦」作業部会は「慰安婦」の問題に取り組み，教育，広報活動，政治的キャンペーンを行なっている。この展覧会の直後に日

[1] この稿では1982年の西ベルリンでの富山妙子の展覧会中に起こった小さな出来事を調査し，それに結びついているローカルで国際的なネットワークと共鳴環境を解明しようとした。それには二次的な文献，雑誌の記事と未発表の資料を使った。私自身がその出来事に参加していたので，運動社会学的分析上，私自身はこの稿ではイルゼ・レンツとして参加している。真鍋祐子先生と李美淑さんにこの興味をそそられるプロジェクトへの参加を可能にし，私をサポートしてくださったことに感謝します。とりわけ浜田和子との素晴らしい共同作業とディスカッションに感謝したい。

本人のベルリン女の会が結成され，展覧会を一緒に準備した。

その後まもなく富山妙子は1982年4月20日から5月8日までベルリンのプロテスタント教会が持つ大きな「教会の家」で展覧会を開いたが，この展覧会も女性たちの連合が準備したものだった。展示の中心テーマは韓国の独裁者，1980年の全斗煥少将のクーデター後の光州で起こった残虐な虐殺，それにたいしての日本の責任についてであった。訪問者は日本，韓国や他のアジアの国々からの人たちで，多くは「第三世界」関係者や左翼の人たちだった。「第三世界」は当時発展途上国の批判的な名称で，継続する資本主義の主都市による従属と暴力を指した。今日では不平等なグローバルな力関係に対する批判は多くポスト植民地主義の観点から捉えられる。後述するように富山妙子のトランスナショナルの作品はトランスフェミニズムに対しても，また自己批判的なポスト植民地主義に対しても意味があり，今日の複雑な問題に対してのイメージとメッセージを含んでいる。

私はこの稿で三つのテーゼを追ってみようと思う。

第一のテーゼはこの展覧会を通じてさまざまなネットワークが作られ，長期的に東アジアやドイツの人たちが集まってきたことである。社会学の運動研究によれば活動を継続してゆくためにはオーガニゼーションが重要である。そして女性運動の中でもこのネットワークが反対意見の形成や国際的な交流の発展のために不可欠なものであった（Wischermann 2003）。新しい女性運動では水平的ネットワークが通常の組織の形であって，全ての会員は対等に結びつき，参加した。この水平的な構造のために他のネットワークとの接触や共同作業が容易であったが，一方もろい面もあった。

第二のテーゼはこのネットワークが，女性空間の中で一緒に集まり，そこでそれぞれの違いを表現し，受け入れられことができたと同時に，その空間には個人の自由，集団としての自由，平等，新しいエロスへの共通の願望が存在していたことである。社会学では社会的な空間は人間のコーディネートされた行動からが成立するという。その一つの例がフェミニストギャラリーでの展覧会であり，女性たちによる共同の準備，例えば場所の準備や，絵を掛けることなどによりトランスカルチャーの女性空間が生まれた。この女性空間はこの空間，つまり物理的な場所があったから生まれたのではなく，展覧会を訪れた女性たちも含むアクティヴな女性たちによってつくられたものである。

第三のテーゼは展覧会のトランスカルチャーのシンボル的な意味である。私はここで一つの比較をしてみたい。フェミニストグループは新しい知識を作り出し，それを広めるとき，知的なネットワークとしてみなされるが，しかしここではアートやシンボル的な形態，一般的ではない知識が問題となっている。それで富山妙子のトランスカルチャーのシンボル的な制作について，知的，美学的なネットワークについて話してみたいとおもう。彼女のアートはラジカルな父系社会にたいする社会批判と並んで，エロス，暴力，民主主義的な平等な参加の問題について，新しいフェミニストのヴィジョンを伝えているからである。ここで言いたいのはこれらのヴィジョンはトランスカルチャーのコンテキストからのものであるが，ベルリンという現場で受容され，理解されたものであるということである。

ベルリンの富山妙子の話から私はらせん状の動きをとった，この展覧会の背後での枝分かれともつれの動きについて言及したいとおもう。まず初めにベルリンのどういうネットワークが展覧会プロジェクトに参加し，女性について，性について，国際的な不平等についてどういう経験や考えをもっていたかについて話したい。その後でこの展覧会と関係する国際的なネットワークや個人史的な経験について言及したい。というのはベルリンでの展覧会の共同作業への道は日本と韓国に続いていたからである。

1980年代のベルリンにおけるトランスナショナルなフェミニストのネットワーク

壁で囲まれた西ベルリンは1970年代以降フェミニストのトランスナショナルなネットワークの苗床であった（Dennert 2007; Gröschner 2018; Lenz 2010; Perincoli 2015参照）。ここには，以下のように多くの要素が集中していた。

1. ベルリンの大規模で，多様な女性運動
2. 増え続けるベルリンへの国際的な移民。移民には様々な集団があったが，未熟練の労働者，韓国からの看護婦のような有資格の労働者，アフリカやインドネシア，韓国，フィリピンなどの東アジアの独裁国家やラテンアメリカなどからの難民，そのほか世界各地からきた学生や，学者がいた。

3. 国際的で文化的にオープンな何十万人という人からなる巨大なオルタナティヴの世界があり，独立したプロジェクトの社会的，経済的な基盤を作っていた。

少しつけ加えると，西ベルリンには1968年の青少年と学生の運動の後，大きなオルタナティヴの世界ができており，世界中からの学生や移民を巻き込んでいた（Lenz 2010a; Reichardt 2014; Sontheimer; Wensierski 2018参照）。フェミニズムは公的には政治の中で行われた議論があり，私的領域ではWG（共同生活）の中や，育児のかたわら，ベットサイドで行われた無数の討論や話し合いの結果，このオルタナティヴの世界で存在を確立し，後々まで影響を及ぼした。私は日本人の友人，寺崎あきこを通じてオルタナティヴのWGを知った。私に富山妙子を紹介してくれたのも彼女だった。社会学者の寺崎はフェミニズムに興味を持っていて，アリス・シュヴァルツアー（Alice Schwarzer）著のフェミニズムのベストセラー『性の深層―小さい相違と大きな結果』(1979）を日本語に翻訳した。

西ベルリンはその後もフランクフルトやミュンヘンと並んで女性運動の中心地であった（Dennert 2007; Gröschner 2018; Lenz 2010, 2019; Perincoli 2015参照）。1968年に最初に作られた新しい女性運動のグループは，アクション協議会（Aktionsrat）でドイツ社会主義学生連盟（SDS, Sozialistische Deutsche Studentenbund）と合併した。アクション協議会はキンダラーデン（Kinderladen, 私設保育所）を作り，幼稚園教諭やその労働組合とコンタクトを取り，また職業についている女性や主婦，母親たちがつめかけた成人教育のコースを作ったりした。その影響で多様なグループやプロジェクトが生まれた。1973年に最初の女性センターがつくられ，1975年にはレズビアンのアクションセンターが，1974年ベルリン自由大学で最初の女性研究ゼミナールが開かれた。1976年に開催された女性の夏期大学には何百人という女性参加者が押しかけた。1970年中ごろからは多くのフェミニストのプロジェクトも定着してきた。そのなかに2つのフェミニストの全国誌があった。その一つはクラージュ（Courage）という名称で，1976年以降ベルリンで発行されたものである（http:library.fes.de/courage; アクセス 1.9.2020）。この雑誌は幅広い国際的な視野を持ち，アフリカやアジア，ラテンアメリカの女性運動も報告した。1978年に韓国からきた看護婦たちが展開したドイツでの安定した雇用と滞在を求めるキャンペーンを記事にしている（前掲

誌：Courage 1978, 4 S. 27/28)。1980 年には「富山妙子の絵，光州虐殺」というタイトルの記事が載った。富山妙子の作品と光州市民の民主的な蜂起と軍の独裁政権による鎮圧についてのスライドシリーズが掲載された。その記

Auf den nächsten Fernsehbildern sind die Straßen erstarrt: die Fallschirmjäger stürmen am 27.5. die Stadt erneut, Panzer und Jeeps rattern, junge Leute werden aus den Häusern auf die menschenleeren Bürgersteige getrieben, gezwungen, sich in engen Haufen hinzulegen, und wie Fische aneinandergefesselt.
Bei den Auseinandersetzungen und dem Einsatz des Militärs in Kwangju kamen nach Schätzungen 400–600 (SZ vom 28.5.1980) oder an die tausend Menschen um. General Chun übernahm wenige Tage später an der Spitze einer dreiköpfigen Militärjunta auch nach außen hin die Macht. Militärgerichte verhängen heute Todesurteile über Mitglieder der Opposition (Kim Dae Jung) und Teilnehmer des Aufstandes.
Präsident Carter bekräftigte die Sicherheitsgarantien der US für Südkorea und äußerte, daß die US die Beziehungen zu ihren Alliierten nicht abbrechen könnten, „nur weil diese den Menschenrechten nicht den gleichen Rang zumessen wie wir." (SZ vom 3.6.80). Doch der amerikanische Befehlshaber des gemeinsamen Oberkommandos der US- und südkoreanischen Truppen hatte ausdrücklich dem zweiten Einsatz der Fallschirmjäger in Kwangju bei der Erstürmung der Stadt zugestimmt.

X.Y.

Unter dem Kennwort „Vögel klagen" sind die 67 Dias bei der Courage zu bestellen. Sie kosten 170 DM (Nur gegen Vorauskasse).

図１　クラージュの富山妙子についての報告

図２「女性」

図３「涙する鳥」

事の初めには苦しみの変容についての彼女のヴィジョンが引用されている。

「鳥は訴え，からす麦は涙した。しかし光州の死者の魂は雨粒に変身するようである。この雨粒は乾いた思想の上に落ち，ゆっくり新しい種をうみだし，いつの日か芽をださせるであろう。この雨粒は固い石をも砕くであろう」(Courage 1980, 12, S. 13–15; http://library.fes.de/courage; アクセス 1.9.2020)。

クラージュは韓国女性グループのことや富山妙子の韓国と光州についての作品を記事にしたが，そのほか定期的に国際的な女性運動，ドイツの女性運動，フェミニズムの催しものやその他の活動のニュースを掲載した。それにより展覧会も女性運動の中で広く伝えられた。

ギャラリー・アンデレ・ツァイヘンも創造的なフェミニズムのプロジェクトの一つであり，女性アーティストのための場所を作ること，アーティストたちのネットワークを作ること，アートに関心を持つすべての女性たちのためにコミュニケーションセンターを作ることを目的にしていた。女性のための絵画コースも開かれた（Courage 1979, 6, S. 44–46)。ギャラリーは女性運動内やオルタナティヴの世界では良く知られていた。当時ドイツのアウトノーム（草の根）の女性運動ではよくあったのだが，ギャラリーは女性のためだけにあり, 男性は締め出されていた[2]。フェミニストたちが男性を締め出した理由は，男性たちが偉そうな大きな態度と物知り顔で女性たちのコミュニケーションの邪魔をし，コミュニケートを阻害したからである。なかには男性と一緒に活動したグループもある。1980 年以降男性との共同作業は，特に平和や環境についての社会的運動や，緑の党の中で増加した。それに対して女性ギャラリーは，いろいろな違いをこえて，すべての女性たちにコミュニケーションの場を提供した。ということは男性を考慮しなくてもよかったが，男性は締め出されるという代価を伴っていた。

ベルリンというフェミニズムの苗床ではつぎつぎに移民の女性グループが作られた（Lenz 2010; 2019 参照)。その中には出身地域別のグループもあっ

[2] 日本ではたとえば新宿リブセンター（1972–1977）のように男性も参加していた（Lenz 2021: Nishimura 2006: Shigematsu 2012 参照）

た。若いトルコ人女性たちは左翼のトルコ連盟のなかで会合を持ち，ドイツや移民社会の中でのネオ父系制度の状況に反対する組織を作った。チリの女性グループはドイツに来ているディアスポラの状況にある女性たちを援助し，当時のチリの独裁政権に反対し，民主主義のために戦った。他のグループやプロジェクトのなかには，トルコの女性たちのためのミーティングポイントやインフォメーションポイントのように，移民女性たちとドイツの女性たちが一緒に活動して作ったものもあり，それらは今も活発である（TIO, 1978）。ベルリン州政府から援助を受けているミーティングポイントはすべての地域からの女性たちを援助し，女性や，少女のための移民教育をし，職業上の再教育や，また女性に対する暴力や難民女性のための相談を受けている（https://tio-berlin.de/english/; アクセス 1.9.2020）。そのほかにも文化や社会部門でさらなるトランスナショナルなプロジェクトを援助している。

1978 年, 様々な過程を経たのち西ドイツで韓国女性グループ（Koreanische Frauengruppe）が組織された。結成の理由は次のようである（Koreanische Frauengruppe in Deutschland 2008, S. 3–6）。朴大統領が維新憲法を公布した後，1974 年の春にドイツの韓国女性たちはあらためて韓国の独裁に抵抗するために結束した[3]。1975 年国際連盟の女性年に国際的に父系社会的支配に対する批判や議論がおこり，平等や自由，発展にたいする関心が高まった。最終的には韓国の看護婦たちは西ドイツの構造的危機のなかで失職し，韓国へ送還される危険に晒された。韓国女性たちは一体となって解決案を探し，ドイツでの生活がもたらす差別，孤立や孤独を克服する際に相互に助け合った。1977 年に自分たちの労働権，滞在権を獲得するために大規模な署名活動を展開し，労働闘争を行ない，成功した。このサークルの一部の女性たちが 1978 年に韓国女性グループを設立した。地域での会合や複数の他の地域グループなどがあったが，その中で活発な活動をした重要なグループはベルリンのグループであった。

グループの目的は，ドイツでの移民としての活動と規定され，彼女たちはそれを韓国の民主化運動の一部，世界の女性運動の部分だとみなしていた。一方で女性運動の理論で韓国社会を批判的に捉え，自己認識や自己の行

[3] Akwi Seo は同じころ起こった日本の在日韓国人の間での女性グループの発展を示している（Seo 2017 参照）。李美淑は韓国の民主化運動と日韓連帯運動を調査した（李 2018 参照）

動決定権を確立しようとしていた。同じように韓国の民主化運動を支援し，ドイツでの韓国人看護婦の労働権利や生活状況についても力を入れた。彼女たちにとって重要なのはグループ内の平等な，日常民主主義的なオーガニゼーション文化であった。それは言葉使いにも表れていて，彼女たちはヒエラルキー的な呼びかけや形式をやめた。さらに自己のアイデンティティを見出すことやドイツと韓国についの歴史的な意識を高めることの必要性を感じていた。彼女たちはこれかあれかという選択を望まず，両方の社会のなかで故郷にいるように感じたいとおもっていた。そのためにドイツにいる自分たちの子供たちと一緒に韓国文化を経験することに努力し，バイリンガルの教育をし，韓国の民衆文化や韓国の仮面舞踏をつたえようとした。今からみると彼女たちはトランスカルチャーのフェミニストグループを作っていて，ドイツと韓国の文化を融合し，相互に助けあったのだった（Koreanische Frauengruppe Deutschland 2006, 2008 参照）。

次第に彼女たちは自分たちをドイツにおける移民と理解し始めるようになり，自分たちの文化や民主主義，社会に対する貢献を可視化し，他のグループと連帯し，同等の市民として自分たちの社会的，政治的な権利を要求した。そして DaMigra（2014–）という，71 の女性連盟が連携している移民女性連合の中央組織でアクティヴに活躍している（www.damigra.de; アクセス 1.9.2020）。

韓国女性グループは「慰安婦」問題の解決に向けて力を入れ，韓国と東アジアにおける中心的な組織である韓国挺身隊問題対策協議会（現・日本軍性奴隷問題解決のための正義記憶連帯，Korean Council for the Women drafted for Military Sexual Slavery by Japan）と連携した。女性グループは催し物を開き，広報活動をし，スタンディングをし，ドイツでこの問題が理解されるように印刷物を作った。韓国女性グループの代表たちは 2000 年 12 月に東京で開かれた日本軍性奴隷制度を裁く 2000 年女性国際戦犯法廷に参加した。法廷の日本の共同主催者はアジアの女たちの会のメンバーで，富山妙子は 1977 年の創立以来のメンバーの一人である。

ベルリンの国際的なミックスグループは作業サークル女性と第三世界（Arbeitskreis Frauen und Dritte Welt）のグループで，社会科学，NGO 途上国援助と第三世界の分野の女性たちが一緒になったものである．目的はネオ父系主義とヨーロッパ中心主義の発展を批判し，国際的な女性連帯，途上国

援助政策に平等と女性の視点を織り込むことにあった。一方で女性たちはマリア・ミースの唱える性と資本主義の自律的存在の影響を受け，他方で世界の南の女性グループを，現場で支援することを望んだ。催し物や，話し合いの輪の中で第三世界の女性たちの運動のネットワークを作ることに貢献した。彼女たちは広く読まれているフェミニストの理論雑誌などに基本的な分析を発表していた[4,5]。

女性運動の世界では国際的女性グループやフェミニストたちはお互いに知っているか，名前を聞いたことがある人たちだったが，作業サークル女性と第三世界のメンバーも南からのフェミニストたちや移民女性たちと遭遇した。催し物や会議の際に，お互いを知り合い，情報を交換した。今日では想像しにくいが，当時は他者に対して非常にオープンで個人的な関心があった。

これらのグループが，1970年末にベルリン・クロイツベルク区で大きな国際女性フェスティバルを開いたときには，数百人の人たちが参加した。主催したのはチリの女性グループで，チリの独裁政権のもとでの民主化運動のための資金が集められた。韓国女性グループもチラシを配り，自分たちで作った食べ物を売ったりした。

精神科学，地域研究，社会科学の分野でもトランスナショナルなフェミニストのネットワークが作られた。1978年イルゼ・レンツはベルリン自由大学で東アジアの女性についてのゼミナールを開いたが，ドイツで初めてのテーマで，中国やドイツ，日本や韓国の学生たちが協力し，自分たちの考えを織り込んだ。なかにはいい友人になり，いまでもコンタクトのある人たちもいる。

1980年の初めにベルリン自由大学の東アジアセミナーに石田雄教授とその伴侶が赴任してきた。ふたりとも富山妙子の友人で，石田雄は日本の政治的な文化と民主主義について，また東アジアのなかでの平和と理解について研究していて，後に日本のジェンダー研究を支援した。石田玲子はベルリン

---

[4] 雑誌「フェミニズム理論と実践への寄稿」はフェミニズムの理論形成と議論についての重要なフォーラムを提供し，当初から国際的な視野をもっていた。既に第一号から女性と第三世界グループの女性たちが参加していた。

[5] もう一つの重要なネートワークは福音教会とミッションヴェルク（Missionswerk）のネットワークで，世界教会協議会（World Council of Churches）として東アジアや韓国の社会的な民主化運動と繋がっていた。残念ながら私にはこのほかの情報と研究結果の情報が少ないので，適切な評価をすることができない。

の日本女性たちと国籍法を例に，性の不平等や移民について話し合いの場を持った。それがベルリン女の会のはじまりで，1982 年ベルリンでの富山妙子の展覧会を協力して開催した。

富山妙子の展覧会はフェミニストのトランスカルチャーのネットワークによって支えられたが，それは西ベルリンの女性運動，オルタナティヴの世界や，精神科学，地域研究や社会科学の分野で発展したネットワークで，展覧会はその人たちにむけられたものでもあった。彼女たちは雑誌のクラージュや，ギャラリー・アンデレ・ツァイヘンのようなフェミニズムのプロジェクトが持っているインフラストラクチャーや，フェミニズムに関心を持つ公衆にインフォメーションやコミュニケーションを発信する手段を利用した。数人のキーパーソンがこれらの様々なネットワークに橋をかけた。石田玲子はベルリンの東アジアセミナーで日本の女性運動と体制に批判的なインテリ世界を結び付けた。イルゼ・レンツは作業サークル女性と第三世界，ベルリンの女性夏期大学などのさまざまに女性グループに属していて，女性教育センター（FFBIZ）の創立グループとしても活躍した。また雑誌のクラージュと関わりがあり，女性ギャラリー・アンデレ・ツァイヘンとコンタクトをとった。イルゼ・レンツはベルリン自由大学の東アジアセミナーの職員であり，政治学研究所の教員でもあった。第三世界運動にも通じていて，雑誌「第三世界の政治と経済」(1980–）の編集員でもあった。

富山妙子の作品は左翼や，第三世界との連帯運動家，ベルリンに亡命した南アジアからの民主主義的，社会主義的活動家にも訴える可能性をもっていた。しかし富山妙子の作品には左翼の社会批判とフェミニズムの間の緊張があった。ベルリンでの左翼は民主主義から毛沢東主義を含む多様な集団や，1980 年に創設された緑の党，それに第三世界運動があって強かったものの，当時の社会民主党の覇権をまえにしては形式的にせよ政治に影響を及ぼすことはほとんどなかった。それでも左翼の女性たちは相変わらず男性中心でネオ父系主義の西ドイツ社会に強く影響されていた。新女性運動のなかのエンパワーメントよってこのサークルの女性たちは次第に活発に参加するようになり，お茶をいれたり，チラシのタイプ打ちの手伝いではなくなっていった。しかし自立して発言し，行動するにはこのサークルの女性たちはいまだに勇気が要り，自信と女性ネートワークの支援が必要だった。インドネシア，マレーシア，韓国からのディアスポラの活動家などの小グループは自分

の出身国の民主化のために活動した。これらのグループではネオ父系主義のモデルや主婦や母親，援助者としての女性像が強かった。女性がタイプを打ち，チラシを配り，会議の食事の準備をするのは自明のこととされ，政治や政策の打ち合わせをするのは男性リーダーだった。私の印象では富山の作品の中の国際的な不平等や，独裁や暴力に対する批判は受け入れるけれども，女性の体の自立的エロスを図像化したフェミニズムにはどちらかというと距離を置いた。死んだ息子を嘆く光州のピエタの図は彼らの現実に近いが，性暴力に対する訴えや女性の自立的エロスのヴィジョンはそうではなかった。この男性中心の世界でも富山のアートに対する関心はあった。しかし女性たちのあいだでの率直な交換はむずかしかったであろう，というのは男性の同志が聞いており，偉そうな態度でディスカッションに介入してきたであろうから。

この展覧会中にいろいろな催しがあったが，日本と韓国とドイツの女性たちの円卓会談での西洋と東洋の女性解放の可能性について話したい。参加したのは韓国女性グループとベルリン女の会と「作業サークル女性と第三世界」であった。事前には女性ギャラリーが催し物の場所として適当かどうか，参加者には疑問があった。東アジアからの女性たちがこのフェミニスト

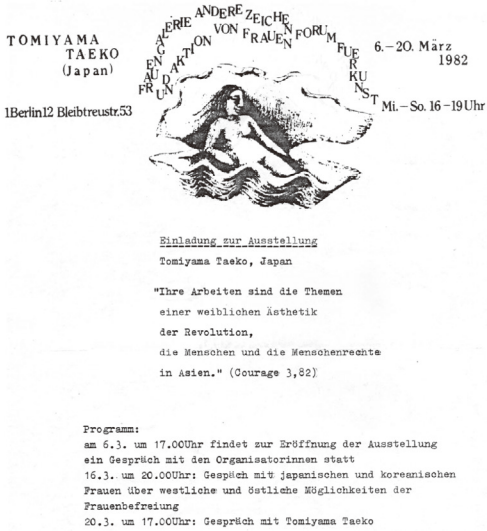

図４　ギャラリーアンデレ・ツァイヘンの富山妙子展の招待状

の場所を受け入れるだろうか？準備の段階で，導入の講演というようなトップ・ダウン式の形式は取らないことを決め，韓国女性グループに導入のステートメントを依頼し，それから皆で意見交換をすることにした。韓国女性は富山妙子の作品や韓国の独裁者や光州虐殺についての作品がラジカルに，真摯に批判をしているのに強い印象を受けた。韓国女性は富山妙子と日本人女性を植民地宗主国の一員としてだけみなすことはせずに，個人的に率直に話をした。まもなく雰囲気は和らいで暖かいものになり，日常での女性蔑視や，人種差別の問題や体験を話し，韓国や日本，ドイツの父系主義の規範について率直に議論することができた。この時の自分と皆の思いを交換するという経験からトランスカルチャーな女性空間がうまれ，すぐに皆と話をし，女性の間の差異についてもテーマにすることができた。韓国女性グループとベルリン女の会は交流をはじめ，今も続いている共同作業を始めた。

国際的なネットワークと現場でのトランスカルチャーの女性空間

この女性空間ができる背後にはローカルだけではない国際的なネットワークづくりと自分史的な経験があった。ベルリンまで達した重要な国際的なネットワークはアジアの女たちの会である。この会は 1977 年，東アジアへの日本企業の進出や植民地の歴史を批判し，アジアの女性の連帯を進めようとする女性たちで結成された。創設者でジャーナリストの松井やよりは，リブ運動に影響を受け，国連の婦人十年のチャンスを利用し，東アジアの民主的な女性運動と連携した。彼女たちは増え続ける日本からのセックスツーリズムに反対し，韓国や南アジアの輸出産業での女性労働者の権利の弾圧，日本と地域の不平等な経済関係とその環境上の影響に抗議した（Lenz 2021; Mae, Lenz 2021, Miki 1992, 1995; Tanaka 2009 参照）。富山妙子はこの社会批判的なサークルで長い間唯一のアーティストで，『アジアの女性解放』や機関誌，そのほかの出版物に作品を載せた。後にアジアの女たちの会は北京で開かれた 1995 年第 4 回国連女性会議の準備や東京での 2000 年の女性国際戦犯法廷で決定的な役割を果たした。

イルゼ・レンツは社会学者でかつ日本学学者でもあり，1979 年にフィールドワークのために日本に行った。レンツは日本の社会はヨーロッパの近代化と同じように説明することはできない，東アジアのコンテキストから見る

ものであると確信していた。それでインドネシア，マレーシア，韓国を調査した。寺崎あきこがレンツをアジアの女たちの会に紹介した。当時は日本の女性運動の中には西洋のフェミニストに対して懐疑があり，距離をとっていた。イルゼ・レンツはすぐ参加したいとおもったが，徐々に受け入れられたと感じられるようになった。富山妙子は初めから親切で友情を結んだ。イルゼ・レンツが1979年に韓国に行ったとき，アジアの女たちの会を通じて地下に潜伏していた民主化とフェミニストのサークルとコンタクトをとり，KCIAをはぐらかして，東一紡績の女性労働者たちに会うことができた。彼女たちは自分たちの権利のために非常に激しい労働闘争を繰り広げ，自分たちの独立した組織をもち，工場の責任者や男性の労働者から性的な攻撃をうけ，殴られたり，汚物を投げられたりしていた。レンツは彼女たちをインタビューし，体制に批判的な労働組合のメディアに掲載し，国際的に広めた。この例が示すように，国際的な女性ネットワークはローカルなネットワークといりまじり，予期しなかった空間で一緒になった。富山妙子の創作は，皆を一緒に結びつけたが，富山自身は象牙の塔の中で絵を描くのではなく，そこに加担していた。彼女の絵はこのネットワーク内で当時既に世界を廻っていたが，それはトランスカルチャーのフェミニストのアーティストとしての彼女の創造力に，また人々の中に出てゆき，彼女たちのために象徴的な解釈やヴィジョンを描く心構えが彼女にあることと関連している。

富山妙子自身はトランスカルチャーの履歴のなかで世界中からの影響を受け，それを総合し，独特な魅惑的な造形芸術に結実させた。(Hein, Jennisson 2010, Tomiyama 1983, 2009参照)。満州で育ち，ヨーロッパの社会主義やシュールレアリスムの美術，ケーテ・コルヴィッツ（Käthe Kollwitz）からオットー・ディクス（Otto Dix），ハンナ・ヘーヒ（Hannah Höch）を研究し，多くの世界旅行でラテンアメリカ，インドや中近東で知った美術を自分に取り込んだ。10年にわたる韓国の独裁や民主化運動，詩との取り組みの後，彼女はその体験を大きく総合し，韓国の民衆文化のモチーフもそこに加えた。九州の鉱山での日本の土のなかに囚われた朝鮮半島からの強制労働者の遺骨の絵を考える。この「韓国時代」が終わり，性的暴力，軍隊，東アジアの女性売買,「従軍慰安婦」の作品がはじまったとき，彼女はユーラシアの天空や太平洋の海底の巫女を呼びだし，強い女性像をつくり，作品のなかに暴力にさらされかつ自立して輝く官能を絵におこした。

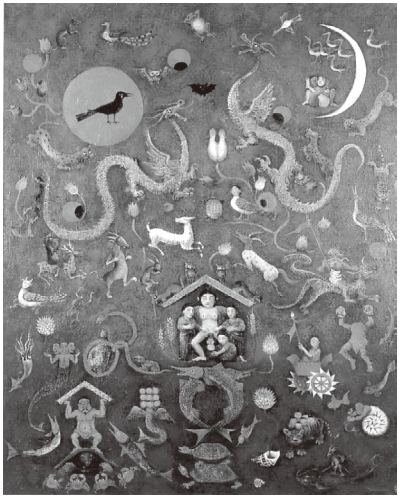

図５　富山妙子作「天駆ける者・馬王堆による」(油彩画，1974 年。宮城県立美術館蔵)

もし富山妙子を日本あるいは東アジアのアーティストというときは，彼女の出自や人生の初期のころの経験を指している。私の見方では彼女にとってはアジアや日本は制約の意味での国境ではなく，ライトモチーフである。この出自的観点でポスト植民地世界からのアートの全方向性を受け入れ，それを性の不平等やグローバルな不平等に対する批判のなかに，またエロスのある，自由で平等な世界のヴィジョンのなかに織り込んでゆく。この意味で富山妙子はトランスカルチャーのアーティスト，あるいは世界のアーティストである。

彼女の多彩なシュールな絵画言語がベルリンで素直に理解されたのは不思議ではない。彼女は絵からスライドを作り，一種の市民メディアとして，問題に深くかかわっているグループが自分たちの活動に使用し，広めることができるようにした。ここで私は知的フェミニズムのネットワークの比較に戻る。このネットワークが強制売春や暴力についての新しい知識を作ったように，富山妙子は絵の中でフェミニズムの基本問題について象徴的な説明をしている。展覧会に付随したスライドシリーズ，あとになっては映画がこの象徴的な解釈をトランスカルチャー的に広めた。トランスカルチャーの知識を回転させる美学的，知的ネットワークともいえる。それは富山の作品のヴィ

ジョンやファンタジー，そしてエロスが刺激的であるからである。

現在はインターセクションのアイデンティティ政策とポスト植民地主義により，文化的でナショナルな力関係に深い影響が出ている。例えば在日朝鮮人と「日本人」フェミニストたちの間で民族的／文化的にどちらに所属するのかが強調されるようになり，両者の間の溝が深くなっているのはパラドックスな効果である[6]。国際的フェミニズムが可能かどうかという問に対しては，富山妙子の作品とトランスカルチャーの絵と運動に満ちている彼女の人生が重要なインパクトを与えてくれる。

（翻訳　浜田和子）

参考文献

Dennert, Gabriele u. a.（Hg.）(2007). In Bewegung bleiben. 100 Jahre Politik, Kultur und Geschichte von Lesben, Berlin: Querverlag.

Gröschner, Annett（2018）. Berolinas zornige Töchter. 50 Jahre Berliner Frauenbewegung, Berlin.

Hein, Laura; and Jennison, Rebecca（Hg.）(2010). Imagination without Borders: Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility. Ann Arbour.

Koreanische Frauengruppe in Deutschland/Heike Berner/Sun-Ju Choi（Hg.）(2006): "zuhause": Erzählungen von deutschen Koreanerinnen.

Koreanische Frauengruppe in Deutschland（2008）. 30 Jahre Koreanische Frauengruppe in Deutschland - 30 Jahre Geschichte der koreanischen Frauenbewegung in Deutschland.
（https://koreanische-frauengruppe.tistory.com/category/ÜBER UNS; アクセス 1.9. 2020）.

李美淑（2018）.「日韓連帯運動」の時代―1970–80 年代のトランスナショナルな公共圏とメディア．東京大学出版会.

Lenz, Ilse（2010）. Die Neue Frauenbewegung in Deutschland. Abschied vom kleinen Unterschied. Eine Quellensammlung, 2. Aufl., Wiesbaden: VS Verlag.

Lenz, Ilse（2010a）. Das Private ist politisch!? Zum Verhältnis von Frauenbewegung und al-

[6] 例えばフェミニスト間のインターセクションの不平等が長期に認められる場合には，彼女たちの間で相互交換や論争をすることによって変えることができる。私はインターセクションの不平等が変化するプロセスを調査する問題定義を開発したが，それをインターセクションの経過に関する問題提議と呼ぶ（Lenz 2019a）。

ternativem Milieu. In: Reichardt, Sven; Siegfried Detlef (2010): Das Alternative Milieu: Antibürgerlicher Lebensstil und linke Politik in der Bundesrepublik Deutschland und Europa 1968–1983. Wallstein, S. 375–405.

Lenz, Ilse (2017). Equality, difference and participation: Women's movements in globalperspective. In: Berger, Stefan, Nehring, Holger (Hg.) (2017). Social movements in global historical perspective. A survey. London u. a.: Palgrave, S. 449–483.

Lenz, Ilse (2010a). Das Private ist politisch!? Zum Verhältnis von Frauenbewegung und alternativem Milieu. In: Reichardt, Sven; Siegfried Detlef (2010):Das Alternative Milieu: Antibürgerlicher Lebensstil und linke Politik in der Bundesrepublik Deutschland und Europa 1968–1983. Wallstein, S. 375–405

Lenz, Ilse (2019). Wer sich wo und wie erinnern wollte? Brüche, Kontinuitäten und soziale Ungleichheit in den Neuen Frauenbewegungen. In: Schaser, Angelika; Schrauth, Sylvia (Hg.), Erinnern, vergessen, umdeuten Europäische Frauenbewegungen im 19. und 20. Jahrhundert. Frankfurt/Main, New York: Campus, S. 255–283.

Lenz, Ilse (2019a). Intersektionale Konflikte in sozialen Bewegungen. In: Forschungsjournal Soziale Bewegungen 2019, 32, 3, S. 408–423, http://forschungsjournal.de/node/3128.

Lenz, Ilse (2021). Differente Partizipation: Frauenbewegungen im Japan In: Mae, Michiko, Lenz Ilse: Frauenbewegung in Japan. Gleichheit, Differenz, Partizipation. Wiesbaden: Springer 2021.

Mae, Michiko; Lenz, Ilse (2021). Frauenbewegung in Japan. Gleichheit, Differenz, Partizipation. Wiesbaden: Springer.

Miki, Sōko u. a. (Hg.) (1992–1995). Nihon ūman ribu shi. 3 Bde. Kyoto.

Nishimura, Mitsuko (2006). Onnatachi no kyōdōtai. 70 nendai no ūmen ribu o saidoku suru. Tokyo: Shakai hyōronsha.

Perincoli, Cristina (2015). Berlin wird feministisch. Berlin: Querverlag.

Reichardt, Sven (2014). Authentizität und Gemeinschaft. 2. Aufl. Berlin: Suhrkamp. Reichardt, Sven; Siegfried, Detlef (2010): Das Alternative Milieu: Antibürgerlicher Lebensstil und linke Politik in der Bundesrepublik Deutschland und Europa 1968–1983. Wallstein.

Rucht, Dieter u. a. (1997). Soziale Bewegungen auf dem Weg zur Institutionalisierung. Zum Strukturwandel “alternativer” Gruppen in beiden Teilen Deutschlands. Frankfurt am Main, New York, Campus

Seo, Akwi（2017）. Creating Subaltern Counterpublics. Korean Women in Japan and Their Struggle for Night School. Kyoto: Kyoto University Press.

Shigematsu, Setsu（2012）. Scream from the Shadows: The Women's Liberation Movement in Japan. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Sontheimer, Michael, Wensierski, Peter（2018）. Berlin. Stadt der Revolte. Berlin: Ch. Links Verlag.

Schwarzer, Alice（1979）. 性の深淵―小さい相違と大きな結果．翻訳　寺崎あきこ．東京，亜紀書房

Wischermann, Ulla（2003）. Frauenbewegungen und Öffentlichkeiten um 1900: Netzwerke - Gegenöffentlichkeiten - Protestinszenierungen. Helmer. Königstein